

E・E・フリートウッド

スウェーデンの資本輸出入

逸見謙三

本書 Erin Elver Fleetwood: Sweden's Capital Imports and Exports, 1947, Geneva, pp. 223. 一八五〇年以降について資本輸出入の歴史とそれが有する問題の理論的側面を分析している。歴史では農業国であり、資本輸入国であつたスウェーデンが工業国になり、第二次大戦後には世界第三の資本輸出国になつた過程、即ち異常な経済的發展、工業化の過程に於いて資本移動の演じた役割を記述している。理論分析では歴史が示した事実

に基いて従来の資本移動の理論の再検討、特に長い論争史を有する資本移動の「古典派」理論と「近代」理論の妥当性の限界の吟味を行つている。所謂ストックホルム学派の動態分析、期間分析法は極端に抽象化された模型を使用する点で近代経済学の諸学派中特徴ある存在であつた。しかしストックホルム学派が單なる知的遊戲のみではないことは、最近注目され始めているエリック・リンダールその他の「スウェーデンの国氏所得、一八六一—一九三〇」等に鑑みても充分注意してよいであらう。本書は一貫して

書評・フリートウッド『スウェーデンの資本輸出入』

美しい理論と実証との綜合を示している。更に本書はカツセル、ヘックシェア、ウリオン等によつても余りにも有名なストックホルム学派の国際経済学の分野に於ける伝統の中から生じた丈の高い理論的レベルを示している。しかし本書をして特に精彩あらしめたのは、著者自身によつて、本書の成立を可能ならしめた條件として指摘されている（一一頁）ごとく、スウェーデンでは他の国に於けるよりもより完全に最近一〇年間の統計資料を入手しうるというその豊富な資料を用いている点によるものである。又本書で歴史的事実が理論検証の資料たり得たのは（私の推測ではあるが）スウェーデンは非常に政治的に安定して居り、経済は比較的自由に發展せしめられたためではなからうか。

以上のように述べてもそれは本書がストックホルム学派の特徴的方法、抽象的模型による期間分析法を使用していることを意味しない。本書はどちらかといえばウリオンが彼の『地域及び国際間の交易』で展開したような一般均衡的価格理論による分析が非常に多い。

本書の構成は次の如くである。先ず序説で本書の目的、計画、方法論（ストックホルム学派の経済学を使用することは抽象的に過ぎる——変数が少い、期間の設定に無理がある——）ので不適当であると述べている）を述べている。次に本書の丁度半分を費して第一部「スウェーデンの資本輸入輸出の歴史」を述べ、更に第二部「理論と事実」、そして最後に結論で歴史及び理論分析の結

果を要約している。第一部では年代順の記述が七章、即ち主要経済期間別に一八九八年前（第一章）、一九一〇年前（第二章）、一九二一以前（第四章）、一九三二以前（第五章）、一九三六年前（第六章）、一九四四以前（第七章）、その後の再建公債 Reconstruction Loans（第八章）の七章を占めている。それに人口の検討（第三章）、一八九八―一九三六年間の国際資本移動の統計的考察（第九章）が附加されている。前者は産業的發展、工業化の過程を人口面から把握したものであり、後者は資本移動量を間接的方法、直接的方法により計測し、両者を比較したものである。第二部では最初に資本移動の理論的検討を行い（第十章）、続いて各二章宛費して貨幣量の変化（第十一、十二章）、価格変化（第十三、十四章）、需要変化（第十五、十六章）を検討している。各二章の中、初の章は理論的検討、後の章は実際の資料の吟味に宛てられている。そして第二部が全体を通して資本移動の「古典派」理論と「近代」理論の比較検討に費されていることは先述した通りである。

第一部は「スウェーデンに於いては資本の輸入、輸出は国民経済の一般の發展の欠くことのできない部分であり、従つて資本移動の物語はその儘経済一般の歴史と同じ時代区分に従つてゐる」（一九頁）という言葉で始まる。事実一八五〇年以前のスウェーデンは未だ産業革命以前の段階にあり、人口の八割が農業人口、一割が工業人口であつたのであるが、続く一九一〇年迄（一八九〇

年代の二回の微々たる輸出を除き）の莫大な資本輸入はこの国の工業化を推進した。一九一〇年の人口の農業は半分以下、工業は三割以上になつた。更に中立国であつたというその後の第一次大戦前後の恵まれた條件で経済發展が進み、一九三六年には長期資本の輸出国となつたのである。そしてこの経過の検討は「明らかにスウェーデンは機会を利用するという点で最善を盡したといえる。輸入資本は概して建設的に、賢明に使用され、第一次大戦は外債支払の機会として利用された」（八七頁）といわしめるのである。そして多くの古い債権国よりも合理化された設備を有する近代的工業国になつており、国際貿易上の強固な地位を確保していた。このような順調な経済發展は第二次大戦後まで続き、戦後の再建公債に際してはスウェーデンは世界第三位、歐洲第一位の債権国になつたのである。（第一位合衆国七、〇〇〇百万ドル、第二位カナダ一、六四五百万ドル、第三位スウェーデン二四二百万ドル、第四位スイス一八〇百万ドル）。

このような順調な發展を可能にしたのは資本輸入を可能ならしめた基礎條件である、初期のスウェーデンは殆んど未開發の自然資源に恵まれており、相対的に不足した資本に較べれば労働「過剩」であつた。就中パルプ原料と鉄鉱である。そしてこの上に成立したパルプ紙製品工業、金屬工業は主要輸出産業となつた。交易比率及び貿易バランスはスウェーデンに有利に決まり、スウェーデンをして資本輸入国から資本輸出国に転せしめたのである。最初の外資は交通機関及び動力部面等基礎産業に投じられた、そ

してこれの整備の上にバルブ工業、機械工業が成立して行つたのである。資本輸入の第二期、即ち一八九八―一九一〇年は資本輸入量も特に多く、又国内貯蓄量も漸増し、更に近代的金融組織が出来上つた。そして輸入資本は多く諸産業に投資された。そして利子率は低下し、資本輸出に転じていつた。これらの諸事實は順調な工業化の過程に他ならない。しかしこの過程でかなり詳細に貿易事情、短期・長期別の資本利子の動き、その公私、会社種類別の投資量、利子率等が述べられているので、要約されて第二部の理論的検討に耐えられるのである。従つてこの過程を含む理論的問題は殆んど第二部で述べられている。私はここに述べられた詳細な事實はヨーロッパの貿易市場の歴史的検討をするものにとつては、かなり有益な資料となるのではないかと思う。ただ我々農業関係者は農業に外資が導入されているということが書かれているその内容を知りたいという望望の願をもたざるを得ない。もちろんこれは決して本書の欠点ではない。

更に一九二二年以降は月別、四季別の検討も若干行つている。

第二部は先述の如く資本移動の理論的考察から始まる。茲で著者は「古典派理論」「古典派」の修正(マーシャル・ヴァイナー)、近代理論を順次に検討した後一般理論を確立する。しかし、この部分は割に概論的でウーリン分析の要約くらいのものである。詳細な、鋭い分析は殆んど貨幣量、価格変化、需要変化の分析に委ねられている。そして所謂「古典派」理論と近代理論の差はト

ランスファに際しての価格の機能の取扱ひにおける差であるから、本書の主要議論も特に価格変化と需要変化で展開され、どちらかといえば貨幣量の変化はその準備として取扱われている。著者のいうように「古典派」の修正においては「他の條件にして等しければ」という他の條件が極めて重要な変化を蒙るものである(二四頁)。だから他の條件を一つ一つ吟味していくことによりかなり完全なものとする事が出来るのである。しかしそうすることは多くの点で近代理論、特に金移動及び短期資本移動(特にbalancing type)の機能の現実的理解を認めることになる。いわば「古典派」理論と近代理論は相互に矛盾するものではなく補完的關係に立つものである。

このような「古典派」理論と近代理論との關係はデータにあてはめて一つ一つ吟味されている。結論は次の如くである。為替相場と資本移動の關係は古典派理論のいう通りであるけれどもそれは金の移動を伴っていない。しかしながら貨幣量の増加がスウェーデンとスウェーデンの貿易相手国間の相対的価格水準に影響しているのは古典派の考えていた通りである。一八九八―一九一三年間には資本輸入国としてのスウェーデンは、資本輸出国たる英・仏より高価格水準にあつた。一九一四―一九二一年間は世界市場によつて強く影響されていた。一九二二年以降スウェーデンはその資本輸出相手国たるノールウェー・デンマークより低価格水準にあつた。これらの例外をなすのが対ドイツのトランスファの場合である。これはドイツの政治的フランによるものであると

同時に、英国を介しての貿易に於いてドイツに対し既に入超になつていたためである。このドイツが示した例外は近代理論が妥当することを示すものである。即ち資本輸入に際して価格変化を必要としない程の資本トランスファーに対する需要の強調である。更に国内諸価格と輸入諸価格間との相対的地位は「古典派」理論の通りである。しかしスウェーデンの輸出品に対する外国の需要が強かつたために、輸出諸価格は「古典派」理論が予想したよりも高かつた。生産費に於ける諸変化もまた「古典派」理論の妥当性を示す（地代、利子率、労賃は夫々異つた動きを示している）、しかし国内の経済発展、特に労働市場に関しては事情は複雑である。そこでは労賃の屈伸性、資本と労働の代替関係も考慮されなければならぬ。

先に述べたドイツの場合の他に近代理論が妥当する重要な事項は、金の移動と短期資本移動、特に balancing type のそれである。資本移動の直接的結果たる金の移動はおこなかつた、そしてスウェーデンの資本輸出入のトランスファーは、主として balancing type の短期資本移動によつて可能だつたのである。又その他の点においても価格変化よりも需要変化を重視する近代理論の立場が妥当する範囲が示された。

以上から著者は本書を次の如き結論で結ぶ。即ち「資本移動の古典派理論、近代理論は共に部分的に正しいことが示された。価格反応と需要反応は相互に矛盾するものではない。スウェーデンにおいてはそれらは同時に起こるのを常としていた。この研究か

らそれらの相対的重要性を示すことは出来ない。金の移動と長期資本移動との間に密接な関係の見られない範囲では短期資本移動がトランスファーを可能にするという近代理論の主張が確認される」（二一七―八頁）と。

以上で本書の内容の簡単な紹介を終る。その内容は、従来余り触れられていなかった近代工業化の過程における資本の役割を論じたものとして大いに価値あるものであらう。また「古典派」理論と近代理論との関係を述べたものとして高い価値を有しているであらう。最近の貿易理論がケインズ経済学の影響により、雇傭と産出高の変動を重視する余りその物価に及ぼす影響を軽視する傾向がある（例えば Fritz Machlup: International Trade and the National Income Multiplier, 1943 はその好例）、完全雇傭の経済において有するトランスファーの影響の分析は多くの示唆を与えるであらう。同時に、この様な体系に働く乗数効果、加速度効果の分析を若干は行つて欲しかつた。（二七・七・二八）

（註一）ただ人口移動と資本輸入が極めて密接な相関を有していたという事実のみは第二部で検討していない。この事実は一九一〇年を端として資本と労働の過剰相対的度合が逆になつたことを示すものである（四六頁）。

（註二）これ等の点に関しては我々農業研究者は必ずしも慣れづいぬ。例えば Ragnar Nurkse: Conditions of International Monetary Equilibrium (Readings in the International Trade 所収) は参考になるであらう。